カバーの下の宝物

伝次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カバ―の下の宝物

【Nコード】

N6033P

【作者名】

伝次郎

【あらすじ】

家出した俺は、五年ぶりに帰って見たが、なかなか入ることができない。親父の財産を持って家出したのだから。しかし、一つだけ気になるものがあつた。それは親父が大事にしていたカバ―が掛けられた宝物。それが何なのか気になって帰ってきたのだが。そして、俺はその正体を知ることになる。

前編

勘違いしてもらっては困るが、別に俺は、強盗や空き巣というわけではない。五年前まで、自分が住んでいた家に帰るだけなんだから。まあ、似たような意味がないわけではないが。

といって、誰も信用してくれないだろう。こうやって何時間も、古びた洋館の前をうろろしていたら。

そりゃ確かに、「ただいま！」と言えば、この家の住人と思ってくれるかもしれないが、長年離れていると、自宅という証拠は役所の戸籍だけしか証明してくれない。いや、その紙切れを見せたって、現在住んでいる奴らは俺を家族とは認めないだろう。

表札は相変わらず「田沼」となっている。もちろん世帯主は親父で、今でも健在のはずだから、何らおかしいことはない。しかし俺は長男、なおかつ一人っ子だからこの家の持ち主は俺と言っても過言　いや、予言とでも言うべきか　ではないはずだ。

しかし、正面から門をくぐるわけにはいかない。絶縁されているかもしれないし、俺だってメンツというものがある。誰の世話にもならず、独り立ちすると誓ってこの家を出たのだから。

しかも、家の財宝を持ち出して……。

確かに家や土地は持ち出すことなどできない。俺がいただいたものは、あくまでも現金と、それと価値の変わらない証券や宝石の類いなど。生活だつてあるし、結婚だつてこれからのだから。

ただ、どうしても欲しいものがある。五年前、家を飛び出したときは考えもしなかった、親父の部屋にある「宝物」。親父は何よりもそれを大事にしていたが、分厚いガラスケースに包まれ、カバーを掛けられてそれが何であるか分からない。だからこそ、それが気になって仕方なかったのだ。

あの金持ちだった親父が言うには、財産がなくなっても、住む家がなくたって、死ぬまで放すことができない「宝物」だと言って

いた。ということ、かなり価値があるものに違いない。

俺はそれが欲しいがために、この家に帰って来たのだ。親父の宝物かもしれないが、そんなこと知った事じゃない。可愛がられたこともないし、俺のことは息子とも思われていなかっただろう。そもそも、小さいころから親父と会うことはあまりなかったのだから。洋館はまだ灯がともっている。寝静まるまで、もう少し待たなくては。

俺は何本目になるか分からない煙草を足下に落として、たまった吸い殻の中で踏みつぶした……。

寢室のソファ―に腰を落ち着けて、田沼喜信はため息をついた。

「外の様子はどうだね」

家政婦が持つてきたグラスに口をつけて、田沼は言った。

「ええ、夕方と変わりありません」

と、家政婦は笑顔で答える。

「ほう、まだいたか」

「五年も留守にしていらしたんですから、なかなか入りにくいと思います。旦那様、できればお迎えに出て上げればよろしいのに」

「そうもいかん。せがれも、もう一人前の男だ。いずれにせよ、決断しなきゃいかん頃だ」

田沼はそう言つて、グラスの水を口に流し込む。そして、山のようにある薬を少しずつ口の中に放り込んで行った。

「頼子、わしのことをどう思うかね」

と、田沼は言った。

「どう、って……お体のことですか？」

「それもあるが、この家のことだ。先祖代々受け継がれてきたこの田沼家を、わしは日本家屋から洋館に建て直したり、家業も農業から、わしが好きだった貿易の仕事に変えて来た。もちろん家族など顧みずにな」

「それが旦那様の望みだったので、悔やむことはありません。

私だって、四十年近くこの家のお世話をさせていただいたのですから、旦那様が本懐を遂げられたお気持ち、よく分かりますわ」

「ふむ、そうか……」

粉薬が喉につかえ、田沼は咳き込んだ。

家政婦があらかじめ分かっていたかのように、背を叩き、タオルを口元へ運ぶ。

「その先はどうだ」

「と申しますと、跡継ぎのことですか？」

「わしには跡継ぎなどおらん」

「今までは、でしょ。でも、五年前まではいらっしやいました。そして今――」

「表におる、か。早く入ってこんと間に合わん……」

「どうなさるおつもりなんですか？」

と、家政婦は訊いた。

訊かれたことに答えることなく、田沼はしばらく、ぼんやりと窓を眺めていた。

「さて、寝るか。といって、二度と目覚めることはないかもしれんがね」

田沼はそう言って、ゆっくりと立ち上がる。そして、いつものように、ベットに横たわった。

防犯のセンサーや監視カメラが設置してあるが、「すき」はいくらだってある。長年住んでいた俺だから、どこからでも入ることは出来るのだ。

俺は子供のころ発見した床下の穴から、洋館の居間へと侵入した。五年も経っているが、内部は何の変化もないようである。現在は親父と家政婦だけしか住んでいないのだろう。

各部屋の様子をそつと窺い、親父と家政婦が眠っていることを確認する。

さて、問題は親父の部屋にある「あれ」をどうやっていただくか

だ。まあ、親父も年寄りだ。目を覚ますこともあるまい。

俺は足音を忍ばせ、カバーのかかった「それ」へと近づく。

俺はカバーを持ち上げようとして、そっと手をかけたときだった。

「お前の目的はそれだけか」

親父がベットに横たわったまま、声をかけて来た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6033p/>

カバーの下の宝物

2010年12月20日12時10分発行